

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

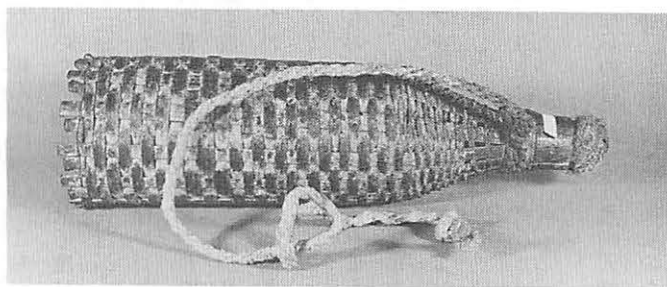
<史料館だより>

目 次

- | | | |
|-------------------------------------|----------|----|
| ◇渡部壽さんと史料館運動 | 大国 正美 | 2 |
| ◇生活文化史料館と父 | 吉川 永子 | 3 |
| ◇深江の漁具—史料館所蔵の漁具について— | 柏原 正民 | 5 |
| ◇神戸市東灘区深江地域の
路傍の石造遺物分布調査報告 | 望月 浩 | 8 |
| ◇わたしの歴史あんない | 史料館調査研究会 | 14 |
| ◇史料館日誌抄 | | 16 |

1993.10.15
NO.19

モンドリカゴ(本誌5P参照)▶



神戸深江生活文化史料館

渡部壽さんと史料館運動

史料館副館長 大 国 正 美

渡部さんが逝った。

『本庄村史』の編纂にはなくてはならない人だった。突然の早すぎる他界を惜しみつつ、史料館運動のなかで渡部さんが果たした役割を顕彰したい。

今更言うまでもなく、この史料館は、地域の人たちの熱意によって、地域の人たちのために建てられ、そして地域の人たちによって担われている。しかし、こうした人たちは、私を含めて、史料館以外に本来の仕事を持ち、日々の生活を営んでいる。「専業でないこと」が業績の上では様々な限界を持っているにせよ、「専業でないこと」こそが、地域に根付いた文化の証しであることは疑いない。ただ、長らく、私たちは専業でないことに、甘えてきた面があったことは否めない。

史料館の創設者である田辺真人前館長が、ニュージージラランドに去った昭和六十年九月、突然、館長代行の大役を命じられた私は、残された仲間と、今後について「私たちが何をなしたかではなく、これまででなせなかったことに、どう挑戦したかを大切にしよう」と話しあった。成果そのものより、途中経過を大事にしようという姿勢である。田辺氏というプランナーを失って、私たちのできることは、自分たちの足で歩くことであった。それまでのような、指示する側

とされる側という関係ではなく、個々が主体的に発想し、行動する集団、それが私の当面の目標とすることであった。

ただ、史料館が社会的な認知を受けなければ受けるほど、成果そのものが問われるのは、当然の理である。丁度そのころ、私は仕事で最も多忙を極める時期を迎えていた。もともと怠惰な私は、忙しさにかまけ、史料館創設以来の宿題である『本庄村史』の作業を停滞させ、史料館にろくに顔も出さない時期が続いた。その一方史料館は地域社会のなかで、歴史史料保存機関としての役割も背負い始めていた。そんな時『本庄村史』の発刊を悲願とする太田垣正雄理事長（当時）が強力な助っ人として呼んだのが渡部さんであった。

実に几帳面で、有能な方であった。頼んだ仕事は、こちらが驚くほどの丁寧さと早さで、処理して頂いた。顔を合わせる度に、次の仕事の催促をされ、そのスピードに逆に私がついて行けず、「今は特に仕事はございません」などと答えなければならなかった。そのうち、自分から仕事を探して、次々貴重な史料整理をされた。

平成元年十二月、本格的に編纂委員会を発足させ、曲がりなりにも編纂事業が次のステップに移れたのも、渡部さんが準備された作業があるからこそ、可能になったのである。

思えば、渡部さんは、成果そのものより、途中経過を重んじねばならなかった当時の史料館の限界と、史料館が社会的認知をされ、結果を求められる要請とのギャップを埋める役割を担って、救世主のごとく史料館に姿を現された。そして、その役割は十二分に果たされた。その間、当初の私の目論見以上に、若いスタッフは多様な成長を見せてくれた。

渡部さんとの思い出で忘れられないのは、やはり魚崎八幡神社文書の整理である。昭和六十三年八月、『本庄村史』編纂のために、魚崎八幡神社の倉庫で初めて文書を拝見した時には、勿論目録など

もなく、湿気のために文書の破壊が急激に進行中であり、『本庄村史』に必要な文書だけを閲覧することが、かえって文書の破壊を進めかねない状況だった。そこで魚崎財産区管理会にご無理をお願いして、全点を史料館に借用し、新修神戸市史編集室と合同で整理を行った。目録を採る際にも渡部さんが、さぼりがちの私に代わって大車輪のごとく働いた。一年二か月をかけ、目録が出来、返却期限が迫っても、一向に文書解読の作業を始めない私のために、渡部さんは五千点余りもの文書を丁寧に一点ずつ読み返し、『本庄村史』に必要な文書の複製を取って下さった。歴史学を専門に学ばれた方ではないのに、その判断の的確さには舌を巻いた。

くずし字も急速に読めるようになられ、これはと思う史料のコピーを取り出しては原稿用紙を黙々と埋めておられた。単調な作業を不平一つ言わずこなされる姿に、頭の下がる思いを何度もした。

温厚で信頼できる仕事ぶりは、長年勤務していた芦屋市からも高く評価され、外郭団体の仕事も任せられ、多忙にも関わらず、史料館にはきっちり足を運んで下さった。体調を崩されてからも、こちらが渡部さんの体調を気遣う位に随分と史料整理をされた。今年の春先、お電話を差し上げた時には、「暖かくなったら、また行かせてもらいます」とおっしゃった。それが、私の渡部さんと交わした今生の最後の言葉となった。

あとで聞いたことだが、死期迫る中で、渡部さんはほんとうわ言のように「机の上の古文書の写しを…」と家族にいわれたそうである。渡部さんの責任感の強さを改めて知らされた思いだ。

今、渡部さんと一緒に『本庄村史』発刊を祝えなかったことが、何につけても残念でならない。一日も早く『本庄村史』を刊行し、墓前に呈することしか、できなくなったことが不条理に思えてならない。改めて渡部さんの冥福を祈りたい。

合掌

生活文化史料館と父

吉川 永子

去る四月一日に逝きました父、壽への生前の皆様のご厚情に改めて御礼申し上げます。

父が残したのは、資料の袋の山でコピーと原稿用紙だらけです。どこから手をつけてよいものやら、主が生き還って整理するわけがないのですが、未だにそのままの状態です。まだまだ勉強したかったらしく、この年明けにも原稿用紙だのフロッピーだのと買いに出かけておりました。

思い返せば、我が家と深江とのおつきあいは、昭和五十五年夏、史料室の誕生前から始まっています。その後史料室は史料館として大きくなり、昭和六十二年、私にかわって初めて父は太田垣正雄氏にお会いしました。「せっかちな人やなあ。」(太田垣さんごめんなさい)といいながらも、どこか自分の父親を見ていたのでしょうか。とても信頼しておりました。史料館にも行き来するうちに父のもっていた人の輪が大きくなったようでした。

一方、住まい、勤めた芦屋とのつきあいは四十五年、山を背に負い、目前には大阪湾が広がり、きれいな水と緑に囲まれた芦屋から神戸・明石の辺りまでが本当に大好きでした。水道の技術畑の人が「芦屋市水道通水五十年史」(平成元年刊)のための資料集めをしていく中で、人との交わりや古文書との出会いに年甲斐もなくワクワクしていたのではないかと思います。深江と芦屋とは「水」を通して古い時代から関わりがありましたから、もっとさまざまな関

わり合いを教えてくれる古文書にも自分なりのこだわりがあったのかも知れません。

ライフワークにいつのまにか地域史を選んでいたのは、過ごしてきた環境と性格によるものだと思っています。先の「通水史」に参加できたことや「芦屋のうつりかわり」（平成二年刊）に関われたことも、いろいろな意味でよかつたなあと思っています。

四月二日に生まれ、一日に亡くなるまで丸七十年の間には、さまざまな山も谷もありました。今思えば、史料館で古文書に出会ったことが、父にとっては人生で最後の没頭できる楽しみとなっていました。

平成三年六月、突然の発病から入院、八月の手術、その後の入院と僅か二年の間でしたが、この間皆様にはご心配をおかけし、また励ましのおこぼをいただきまして本当にありがとうございます。術後の秋、すっかり元気になり、昨年春からは、また史料館に出かけて古文書を手懸けることができるようになっていましたから、昨年十一月退院の時には史料の写しと原稿用紙で包み一つできておりましたのに。

未だに何かしておりましたも後ろから「おい。」と声が聞こえそうな毎日です。先日も史料館へお伺いしましたら、「あそここの階段から降りてきそうで、まだ信じられへんですよ。」と仰っていたので、改めて親しくしていただいていたことをうれしく思いました。

父の「外面」をあまり知らないのですが、「面白いという印象はないのだろうな」と思います。小柄で目の大きい、とつきにくそうなおじさんじゃなかったでしょうか。長くおつきあいいただいていたはじめて良さというか味がわかるという人でした。家の中では、人にも厳しいかわりに自分にも厳しい人でしたから、私が子供の頃には、なんと石頭のガンコおやじだろうと思っておりました。相当大きく

なつてから、他所様に対しては「外面」のいい人だと知った次第です。とりとめもなく思いつくままに書いてしまいました。また新たに始まった深江の街での人とふれあいの大きな輪に恵まれたこと、本当に喜んでいたいと思います。本当にお世話になりました。ありがとうございました。



わたなべ
渡部 壽氏
ひさし

略 歴

- 大正十二年四月二日 大阪市に生まれる
- 昭和十六年三月 大阪府立生野中学（旧制）卒業
- 昭和十九年九月 宇部工業専門学校機械科（現山口大学工学部）卒業
- 昭和十九年九月 トヨタ自動車工業（株）入社 愛知県刈谷勤務
- 昭和二十年一月十日 召集により広島第二部隊入隊
- 昭和二十年五月 福岡県折尾へ転属
- 昭和二十年八月 折尾にて終戦を迎える 再び愛知県刈谷へ
- 昭和二十三年七月 トヨタ自動車 退職
- 昭和二十三年十月 芦屋市役所入所 水道課勤務
- 昭和五十一年三月 芦屋市建設部を退職
- 昭和五十一年四月 ㈱恒和設備工業に入社
- 昭和六十一年三月 同社 引退
- 昭和六十二年五月 芦屋市水道部嘱託勤務 この頃より史料館に
- 平成元年四月 芦屋市水道サービス協会発足 同協会へ勤務
- 平成三年十月 六月発病 治療のため退職
- 平成五年四月一日 午後五時五十五分 永眠

深江の漁具

— 史料館所蔵の漁具について —

柏原 正 民

一、はじめに

神戸深江生活文化史料館には数多くの民具が収蔵されている。なかでも深江の浜で昭和四十七年頃まで使われていた漁具は、現在すっかり景観を変えてしまった海辺の様子を伝える資料である。

深江で行われていた漁業については、「本庄村史」編纂における民俗調査が行われており、平成三年度の特別展「魚をとる」でもその成果について展示されている。

このたび筆者は、深江で使われてきた漁具について観察する機会を得て、順次実測作業等を実施している。これらのうち、特に興味を持った二つの漁具、「モンドリカゴ」と「タコツボ」について、気づいた点を紹介してみたい。

二、モンドリカゴ（図1・表紙写真）

魚を捕まえるカゴで、酒の五合瓶に似た形をしている。川や海の流れに沿ってくる魚介類が入り込むところを、後戻りできない習性を利用して捕まえてしまう。このような魚を捕獲用のカゴの名称から「筥（ウケ）魚」と呼び、全国各地でカニ・ウナギ・アナゴなどを捕獲するのに行われている。

史料館所蔵の筥は、地元では「モンドリカゴ」と呼ばれている。

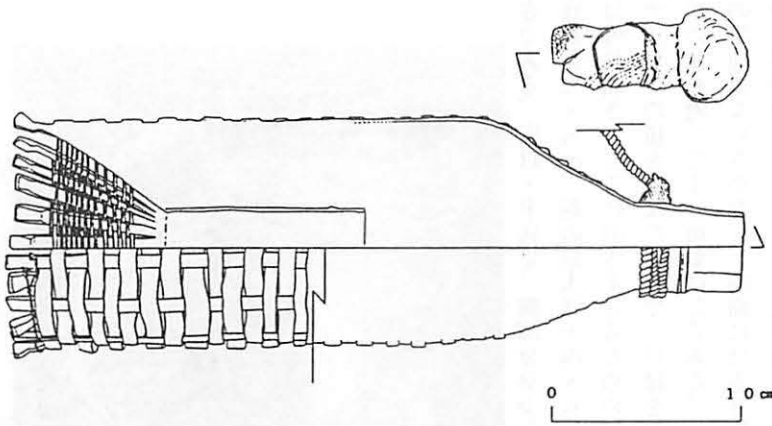


図1 モンドリカゴ(柏原実測)

アナゴ魚のため使用されたもので、全長は三十八・八cmを測る。瓶の底にあたる部分が開いており、ここから魚が入る。全体は正円形で直径は十二・八／十・四／三・四cmの先細り、底部の内側は逆三角錐のカゴを入れ込んだ二重構造となっているため、身の細い魚は身動きが出来なくなる仕組みである。また、先端には綿を束ねた栓がしてあり、捕まえた魚はここから抜き取ることが出来る。

本体は、節を抜いた二本の竹筒によって作られている。外部（図1下半部）では、竹の片側だけを細く十三等分して骨とし、竹の輪

を編み重ねて円錐形を形作る。適度に水が抜けるように目を開けており、重ね方は縦軸・横軸双方を交互に組み合わすパターンをとる。割らずに残した竹の部分が魚を抜く先端となる。

内部(図1上半部)は、直径三・六cmの竹を同じく片側だけ十三等分に割り、円錐上に編み込んである。外部の底から挿入して、口の部分を針金で固定している。外部と同じく交互に組み合わせて編み込んで行くが、一本の横軸の幅二mmとずいぶん細い。割らず筒状に残した片側は長さ十・四cmで、内部に魚が一度入り込んでから、後戻りしにくいよう先端まで達していない。表面はいぶして炭化させ、仕上げている。

単純に流れを必要とすることを考慮すれば、川漁のほうが適しているように思う。また本格的な漁だけでなく、農作業の合間に水路に釜を沈めてドジョウなどを捕ることは比較的よく行なわれていた。しかし尼崎では漁民がウナギ漁に使用しており、タコツボと同じく幹繩にくくり付けて沖合に沈めて捕獲していたという。

深江ではよく浜辺に沈めてあったそうで、この資料も海でアナゴ捕りに使われていた以外の詳細は不明だが、片手間的な色彩の強い漁法であったようだ。

三、タコツボ(図2・写真1)

大阪湾沿岸では多くの地区でみられ、明石や泉州では今も多くの漁師がタコツボによる漁を行っている。

深江浜で使われていたタコツボは、一点だけを収蔵・展示しているが、壺を使ったタコ漁はあまり盛んではなく、数軒しか行っていない。なかつたようである。なお深江では副次的なものだが、カニを餌として針にくくり付けタコを釣る漁もあった。

史料館に収蔵されているタコツボは、全長二十五・五cmを測る素

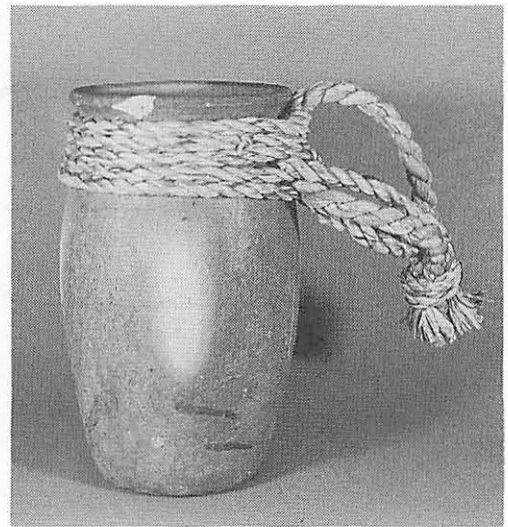


写真1 タコツボ(藤川撮影)

焼きの壺である。広口・平底で、胴部分が少し張る。口縁の直径十二cm・底部径九・八cm、胴の最大径十四・八cmをそれぞれ測る。口縁部分は外に開き、ここに引き上げるための紐(枝繩)をくくりつける。ナイロンの紐を編んだもので、口縁を五周してあるほかにもう一本別の紐を通してより頑丈にしてある。

外側の器面はなめらかだが、内面には壺を作る時に積み上げた粘土の接合痕跡が残っている。また底の外面には「ほ」の文字が書かれているが、壺を引き上げたとき判別できる工夫であろうか。

現在使用されているタコツボは、明石型・伊予型・讃岐型の大きく3つの形態に分類されている。この形の違いは、それぞれを使用する漁場の性質によるもので、言い換えればタコツボが必要先に合わせて生産されていることがわかる。このタコツボは明石型に属するもので、潮の流れが速い漁場を反映して、安定性の高いズンドウ形が特徴である。この形態のツボは、兵庫県の播磨灘から大阪湾沿岸の泉州・和歌山にかけて分布している。

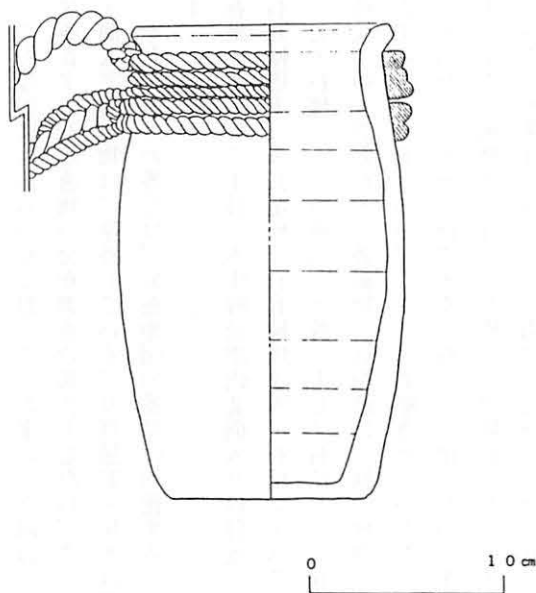


図2 タコツボ(柏原実測)

四、おわりに

筥を使って魚を採ったり、タコを捕まえるために壺を用いる漁法は、古く弥生時代にまで遡ることができる。ともに獲物の習性を利用する漁であり、人間がこれらの習性を古くから知っていたことは人間の知恵を改めて感じさせる。史料館に遺された漁具とともに、漁師町の一面を知る手がかりとして、また阪神間では姿を消してしまつた漁業の様子を知る上でも貴重な資料といえよう。

それぞれの漁は当時の深江において主流を占めるに至っていないかった。組織的な地曳き網漁が主体であつたことから考えて、網の入

れることのできない時期に行なっていたか、網元に属さない漁師が行なっていたものであろう。このような独立的な漁師の存在については、阪神間でもあちこちで確認されており、今後機会を改めて調査してみたい。

今回紹介した以外の漁具についても順次実測を行つており、機会を改めて報告する。また、当時深江で行われていた具体的な漁法などについては、すでに報告があるため、本稿ではくわしく触れなかった。以前の報文を参照していただければ幸いである。

なお、この資料紹介に当たっては、本庄村史編纂委員会民俗調査班の諸氏に数多くのご教示を得た。また資料の写真撮影は藤川祐作研究員の手を煩わせた。文末ながら深く感謝申し上げる次第です。本人の知識不足と時間の制約から、不十分な内容であることは自認しており、引き続き調査を続けていきたいと思ひます。資料の図化におけるご批判等も含めて、みなさまの様々なご意見・ご教示をよろしくお願い申し上げます。

〈参考文献〉

- ◇小林茂「筥」『民具研究ハンドブック』雄山閣(一九八五)
- ◇三枝妙子「たこつぼ(タコ壺)」『民具実測図の方法(漁具編)』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第13集(一九八九)
- ◇真野 修「原始・古代の飯蛸壺繩漁の検討」『神戸古代史』8号 神戸古代史研究会(一九八九)
- ◇望月友二・下久保恵子「深江の漁業について」『生活文化史』16号 神戸深江生活文化史料館(一九九一)
- ◇下久保恵子「深江の漁業について(その2)」『生活文化史』17号 神戸深江生活文化史料館(一九九二)
- ◇森 隆男『尼崎の漁業』尼崎市教育委員会(一九八八)

神戸市東灘区深江地域の 路傍の石造遺物分布調査報告

史料館主任研究員 望月 浩

『本庄村史』編纂の一貫として石造遺物調査を進めている。石造遺物は、元來信仰の対象として造立されることが多いので、その所在地は寺社の境内地や墓地などによく見られる。しかし、普段見逃している町のなかにも、地藏盆の時などには飾り付けられて目立つので、こんな所にもあるのかと思うことが多い。今回は、そうした路傍に所在する石造遺物の分布調査の報告をしたい。よって、寺社・墓地・個人宅内の物は、除外している。写真撮影・拓本は望月が行った。なお、個々の番号は、分布地図の番号に対比する。

○No. 1

*所在地・本庄町三丁目 本庄町公園内北側入り口付近

●一石五輪塔十三・長足形一石五輪塔十四・石仏（すべて弥陀如来か？）七・石標一・その他二 総数三十七。石仏、一石五輪塔とも室町時代の頃と思われる。各遺物の計測値は、別の機会に一覧にして報告する予定であるので、ここでは省略させていただく。大半は総高五十 cm から六十 cm の物である。石仏は風化のため、像容は不明。昭和十四年の区画整理の時に、高橋川の堤防付近から出土したといわれている。地藏盆の時には、公園内で盆踊りが行われる。

○No. 2

*所在地・深江北町四丁目 白鷗橋のすぐ東、高橋川の南。



No. 1 石仏

●近代になって作られた、地藏石仏を二基祀っている。

○No. 3

*所在地・深江北町四丁目 高橋川と要玄寺川の合流地点北側。

●仏像が陽刻された板碑一基（総高八十五 cm）と一石五輪塔が二基。板碑は室町時代の物と思われる。頭部は山形で、風化で像容がわかりにくい。頭に冠のような形が見られることから大日如来と思われる。両脇の一石五輪塔は、向って左側が総高四十三 cm で完形。右側は空風輪のみで現高十五 cm である。いずれも材質は花崗岩。

○No. 4

*所在地・深江北町四丁目 阪神電車深江駅北、通称稲荷筋から西へ路地を入ったところ。

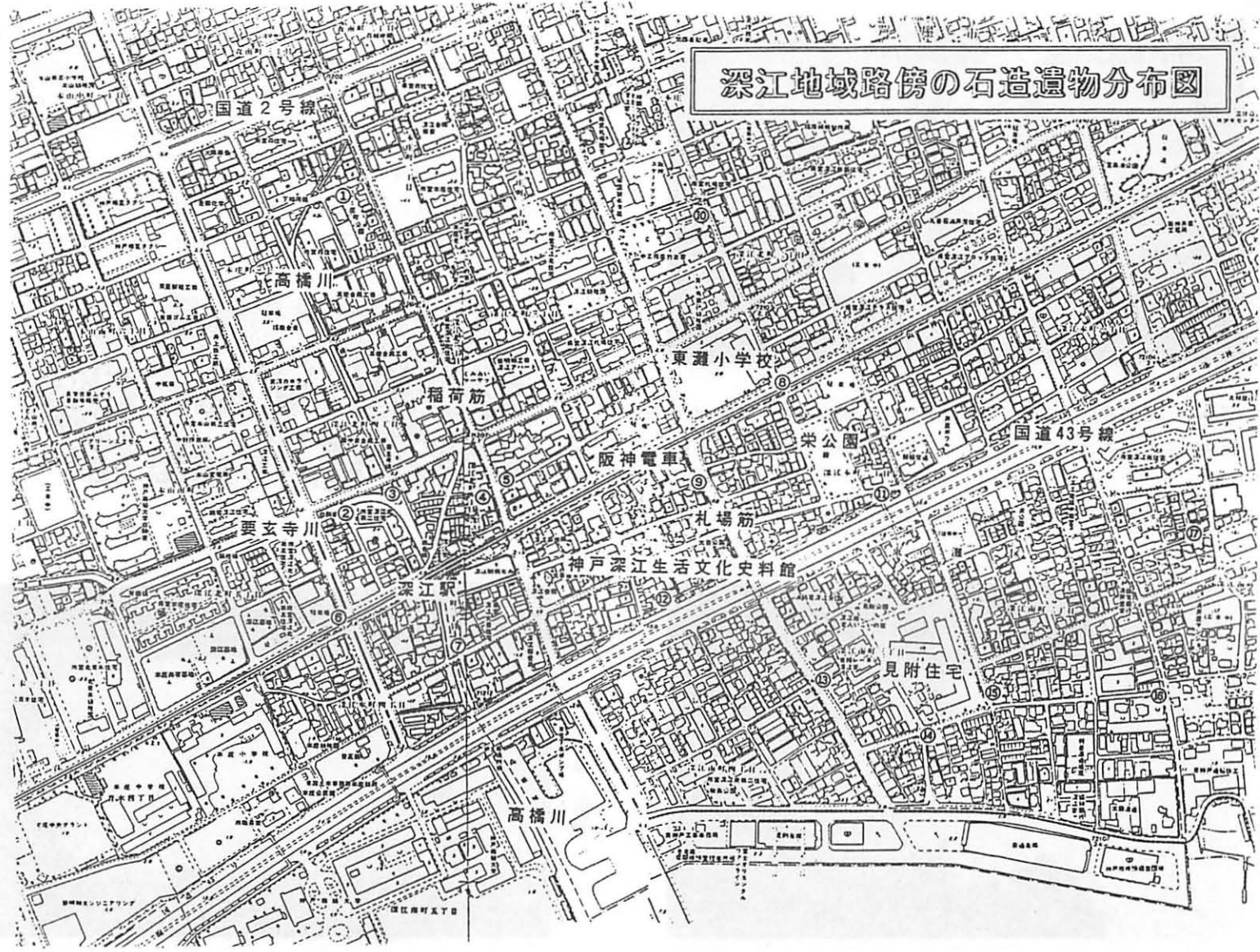
●近代の石仏が一基祀られている。

○No. 5

*所在地・深江北町三丁目 阪神電車深江駅北、通称稲荷筋より No. 4 の反対側の筋を入った北側。

●花崗岩製の完形の一石五輪塔が一基と、砂岩製の一石五輪塔の空

深江地域路傍の石造遺物分布図



風輪部が祀られている。花崗岩製の方は、総高四十八cm。やや破損が目立つが、ほぼ完形。砂岩の方は、現高十七cmである。空風輪の形は古調を感じさせる。どちらも室町時代の物か、やや砂岩製の方が古いと思われる。

○ No. 6

*所在地…深江北町五丁目 阪神深江駅西踏切北東角。

●近代になってから祀られた地藏石仏が二基。



No.3 拓本(12.5%に縮小)



No.3 板碑



No.7 祠前、一石五輪塔左塔

○ No. 7
*所在地…深江本町三丁目 旧浜街道と高橋川の交差するところ北東角。
●通称、踊り松地藏。近代になってからたてられた石仏一基と、一石五輪塔が四十九基。一石五輪塔はいずれも花崗岩製。各遺物の計



No.5 砂岩製一石五輪塔空風輪部



No.8 石仏

測値は、別の機会に一覧にして報告する予定であるので、ここでは省略させていただきます。総高は、四十cmから六十cmの物が多い。この辺りに散在していたものを一ヶ所に集めて祀っている。祠の前にある二基は本格型。向って右の物には、各部四方に梵字が刻まれている。



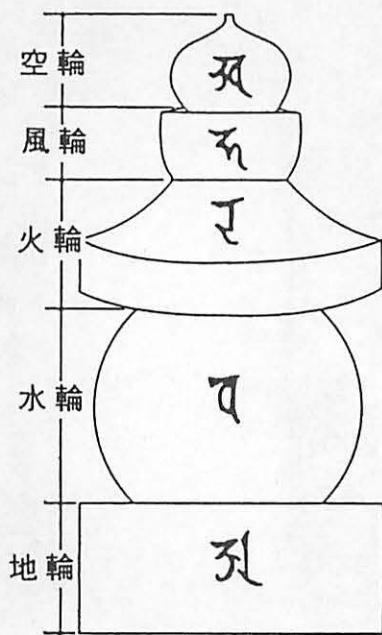
No.7 祠前、一石五輪塔右塔



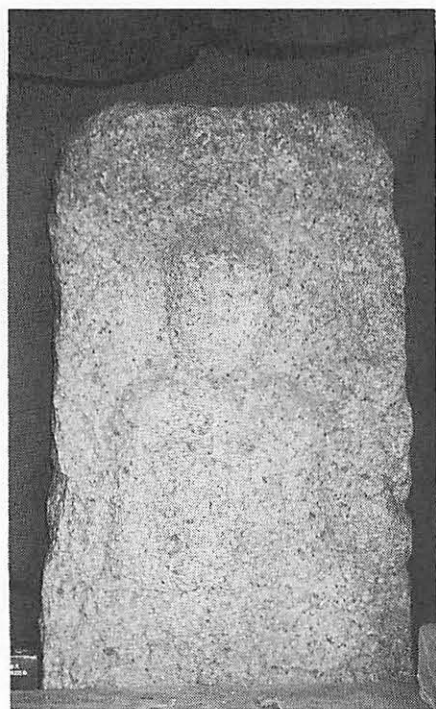
No.9 石仏

- No.8
*所在地…深江北町二丁目 東灘小学校南東角J R沿い。
●光背を備えた弥陀如来と思われる石仏が一基。総高五十六cm、風化が激しく、像容は判別しにくい。花崗岩製。
- No.9
*所在地…深江北町三丁目 通称札幌筋沿い西の歩道上。
●合掌印をした首から下の部分の花崗岩製の石仏の上に、砂岩製の頭部の石仏を乗せている。他に一石五輪塔（部分）が四基と、反花のある基壇が一基祀られている。
●昔は地藏盆の時に数珠繰りをしていた。もう大分前から行われていない。数珠は現在磯野家に保管されている。
- No.10
*所在地…深江北町二丁目 本庄町中公園南、路地入り口。

- 一石五輪塔が二基。左…総高四十五cm、右…三十四cm。地藏盆の時には、北の本庄町中公園に移動させて、盆踊りなどのお祭りをしていた。いずれも花崗岩製。
- No. 11
 - *所在地…深江本町二丁目。栄公園の東、浜街道が国道四十三号線に合流するところ。元は栄公園の西、浜街道北側にあったが道路拡張後、現在位置に移動。(十七、八年程前)
 - 仏像が刻まれた板碑が一基とそれに寄り添うように光背を備えた石仏が六基(祠の中)。祠外に一石五輪塔が三基。板碑は、No.3より頭部の尖りが目立つ。
- No. 12
 - *所在地…深江本町三丁目。大日公園南西 国道四十三号線北側。
 - 長足形一石五輪塔の地輪部と思われる花崗岩(高さ二十八cm)の上に、砂岩製の地藏石仏の頭部を乗せている(現高三十八cm)。傍らには近代の姫神像の石像が見られる。



五輪塔各部名称



No.15 石仏

- No. 13
 - *所在地…深江南町三丁目 国道四十三号線南、旧札場筋東沿い。
 - 一石五輪塔が五基、一石五輪塔地輪部(石仏が陽刻)のみ一基、光背を備えた石仏が二基。いずれも室町時代の物と思われる。いずれも花崗岩製。
- No. 14
 - *所在地…深江南町三丁目 No.10より南東方向の四つ角の南東角、公衆電話の横。
 - 近代になってからつくられた地藏石仏が一基祀られている。
- No. 15
 - *所在地…深江南町二丁目 見附住宅東。
 - 上部が水平になっている光背を備えた石仏が一基。総高四十五cm。風化で像容はほとんどわからないが、弥陀如来と思われる。花崗岩製。
- No. 16
 - *所在地…深江南町二丁目 市営住宅南側。路地奥。

●石仏が刻まれている、長足形の一石五輪塔の地輪部が一基祀られている。現高四十・五cm。花崗岩製。

○No. 17

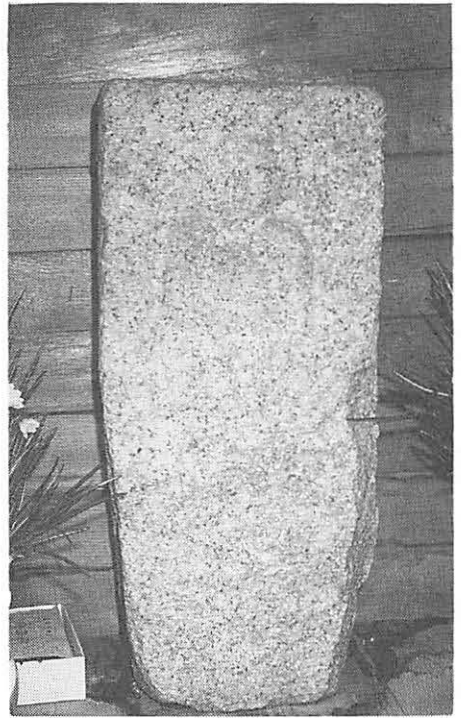
*所在地・深江南町二丁目 神楽橋跡の碑より南西、伊丹氏宅北東の堀に祠が埋め込まれている。

●一石五輪塔が一基祀られている。空輪が欠けており、別石の空風輪を据えている。現高五十六cm。

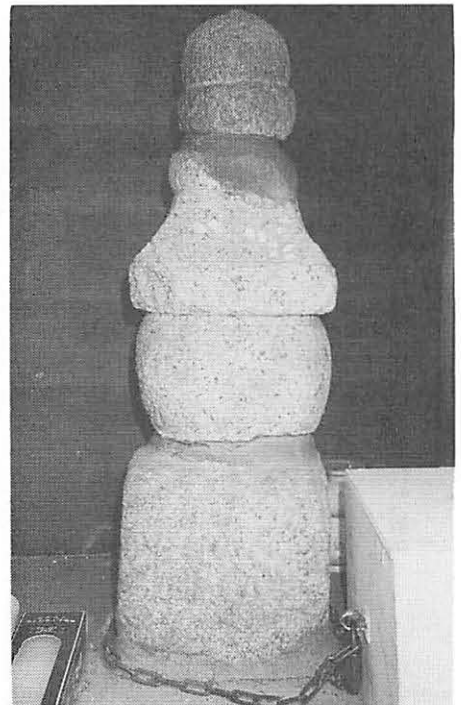
以上が深江地域における分布調査結果報告であるが、完全に市街地化している地区にあっては以外と多いというのが実感であった。まとめると次の通りである。

- 一石五輪塔 九十八基
 - 近世以前の石仏 十七基
 - 近代以後の石仏 七基
 - 仏像が刻まれた板碑 二基
 - その他 四基
- となっている。

しかもすべてが祠に安置されていて、信仰の厚さが伺える。地蔵盆の行事の時には、ほとんどが提灯等で飾り付けをしている。書い



No.16 一石五輪塔地輪部



No.17 一石五輪塔

てきたように、祠の中には一石五輪塔だけ祀られているものもあり、それでも地蔵盆には地蔵として祀られていた。これは神戸市街地の他地域でも見られ、いつごろから混同して祀るようになったのか興味の対象となるところである。地蔵石仏はすべて近代になってからの物で、他の近世以前の石仏で見られるのは、弥陀如来が大半であった。弥陀如来は、浄土・浄土真宗の本尊とされることから、東灘区に多い浄土・浄土真宗の寺との関係も、今後の研究対象となるであろう。

また材質はほとんどが花崗岩である。これは御影石の産地に近いという背景があるが、一基だけ砂岩の遺物が見られ、その産出ルートも研究課題となるであろう。

はなはだ簡単であるが、今回の調査報告が今後の研究の一助になれば幸いである。

なお、今回の調査においては、史料館の藤川祐作・伊東玲子、深江在住の志井保治・清水久雄・村上政輝・森尚美のかたがたのご協力をいただいた。文末ではあるが感謝を申し上げたい。

わたしの歴史あんない

史料館調査研究会

神戸深江生活文化史料館も開館以来十二年を数える。また街角の小さな「史料室」の時代から「史料館」へと施設の充実をはかって今年で九十年の月日が経過した。この間、地域の住民の方々の理解と多くの来館者にご支援いただき運営してこれたことは、一同この上ない喜びである。専従の学芸員などを置かず、スタッフがボランティアで構成されている当館は、「博物館」としての矛盾とも言うべき問題を逆手にとって、軽いフットワークで運営を行っている。過去に行われてきた特別展などは、当館の個性とスタッフの努力の現れと自負している。

しかしすべてが順風満帆と言う訳ではなく、課題も数多い。とりわけ直面する大きなものは、当館の展示システムのあり方である。例えば常設展示は現在まで部分的な変更を行っているものの、構成そのものは開館以来変更していない。当初考えて工夫した展示方法も、時間の経過の中でいささかくたびれてきた。とは言え「常設展」という完成された展示の中では、「変化」をつけることにも限界がある。

現在の展示計画では、原則として一年に一回の特別展のほかに、二Fの囲炉裏端に季節にあわせた生活用品の展示を、また一Fの床の間には正月のお飾り・三月の雛人形・五月の武者人形などを陳列

するスケジュール展示を行っている。また新しく収蔵した資料の紹介も随時実施している。しかしこれらの部分は、展示スペースからみれば全体の十パーセントにも満たず、二回目以降に訪れる方にとっては「変化」に乏しい印象を与えている。

全面的に常設展示を改訂することが、一つの解決策であろう。しかしながら限られた当館の展示スペースと人員の中で、大幅な変更を実施することは、実際には不可能に近い。また、これにかわる特別展の企画・開催にも限界がある。正直なところ、長い時間をかけて漸次的に改良していくことが精いっぱいなのである。

一方でスタッフの間には、「このまま変わり映えしない・目新しさがない展示を続けることは、新たな来館者層の開拓につながって行かない」との危機感が常につきまとっている。

慢性的なジレンマの中で、これらを少しでも解消しようとスタッフが話し合った結果、一つの試みが提案された。比較的自由的な展示が可能な一Fのスペースを利用して短い企画展を行うものである。展示内容は、館運営と平行して行なっているスタッフの自主的な研究成果を「展示」と言う形で発表してみるのはいかがでしょうか、との意見がだされた。意見調整を進めた結果、「わたしの歴史あんない」のタイトルのもとに、それぞれの個性を生かしたテーマ・展示が開催されることになった。

第一回は史料館周辺の石造遺物の拓本展をおこなう。本庄村史編纂にとまない周辺の石碑や石仏などの石造遺物が調査され、石に刻まれた深江周辺の歴史を明らかになってきた。今回の展示では特に四つの石造遺物について、その拓本を展示した。

① 旧本庄村道路元標

② 深江北町四丁目所在の仏像が陽刻された板碑

③ 大日神社境内の石灯籠（元禄七年銘）

高橋川に架かっていた石橋の基礎石（正徳二年銘）

④ 高橋川に架かっていた石橋の基礎石（正徳二年銘）
 また第二回は「史料館周辺で行われた発掘調査」と題し、兵庫県埋蔵文化財調査事務所の協力を得て、史料館の近辺でここ最近行われた発掘調査の成果について、発掘現場の写真を中心に紹介する予定である。

史料館では以前、深江北町遺跡の発掘調査が行われた際、特別展「深江北町遺跡展」として、出土品や調査成果の展示を行った。その後も深江周辺では、様々な時代の遺跡が見つかり、発掘調査が行われている。兵庫県埋蔵文化財調査事務所のご協力を受け、三ヶ所
 ①北青木遺跡・北青木一丁目 ②小路大町遺跡・本山南町二丁目



第1回展示風景(藤川撮影)



1988.10.23 友の会和歌山方面バスツアーで
 真中男性が渡部壽さん(望月撮影)

本年四月一日に、史料館で古文書の調査をされてきた渡部壽氏が逝去されました。
 若いスタッフが多い史料館において、父親的存在でわれわれを見守ってくれていました。ここに、ご冥福をお祈りします。
 奥ゆかしい方であったので、意外と史料館で撮影した生前のお姿は少なかったのですが、その中の一枚を掲載します。写真でも見られますが、史料館でもよく吸われていたタバコ姿が今でも目に浮かびます。

③本庄町遺跡・本庄町)の遺跡について、写真パネルで紹介する。今後も四カ月の期間で数回のローテーションをおこない、様々なテーマの展示を行う予定である。このささやかな企画展は、それぞれの研究活動―好奇心の公開と同時に、「変化」が乏しい現在の展示に対するスタッフの一つの挑戦である。
 今後の史料館における展示スタイルを模索する上での一つの実験として、多くの方々にご意見・ご感想をいただきたいと思う。数多くのご来館をお待ちする次第である。
 (文責 柏原)

史料館日誌抄

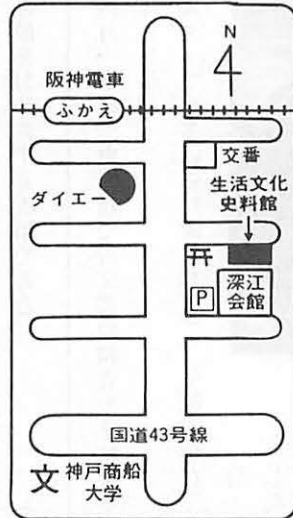
H 4 年

- 6月25日 東灘区役所新規採用職員研修 (見学者17名)
- 6月28日 友の会 第87回例会 (参加者 80名)
バスツアー「東播磨の仏教・地域文化を訪ねて」
講師 田辺眞人氏
- 8月8日 友の会 第88回例会・東灘区民センター、
東灘区役所共催 (参加者 120名)
東灘区民センターオープン記念講演会
「日本史の中の東灘」 講師 道谷 卓氏
- 10月10日 友の会 第89回例会・東灘区体育協会共催
(参加者 90名)
「第10回魚屋道を歩く会」 案内 望月 浩氏
- 10月25日 友の会 第90回例会・神戸市中央区役所共催
(参加者 120名)
見学会「第3回中央区歴史物語を歩く」
講師 道谷 卓氏 望月 浩氏
- 11月22日 カブスカウト神戸33団 (見学者 16名)
- 11月27日 御藏小学校 3年生 (見学者 47名)
- 11月29日 友の会 第91回例会 (参加者 84名)
バスツアー「安土城跡を訪ねて」
講師 道谷 卓氏

H 5 年

- 1月22日 真野小学校 3年生 (見学者 52名)
- 1月29日 春日野小学校 3年生 (見学者 49名)
- 1月30日 東灘小学校 3年生 (見学者 190名)
- 1月5日 本山第三小学校 3年生 (見学者 146名)
- 1月6日 本山南小学校 3年生 (見学者 111名)
- 2月10日 向洋小学校 3年生 (見学者 140名)
- 2月19日 福池小学校 3年生 (見学者 102名)
- 2月20日 本庄小学校 3年生 (見学者 227名)
- 2月26日 魚崎小学校 3年生 (見学者 200名)
- 2月27日 諏訪山小学校 3年生 (見学者 91名)
- 3月28日 友の会 第92回例会 (参加者 70名)
史料館開設12周年記念講演・友の会総会
記念講演「紅茶を運んだイギリス船」
講師 杉浦昭典氏
- 6月6日 友の会 第93回例会 (参加者 110名)
バスツアー「史跡ウォッチング東灘」
講師 望月 浩氏 道谷 卓氏
- 6月28日 東灘区役所新規採用職員研修 (見学者30名)
- 7月12日 伊丹市社会福祉協議会 (見学者 38名)

編 集 望月 浩
行 神戸深江生活文化史料館
〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-7
078-453-4980



毎週土・日曜日開館
午前10時～午後5時まで
入館無料

- ◇協力団体◇
神戸市教育委員会／芦屋市教育委員会
東灘区役所／大丸百貨店／本庄五校園
明石市立天文科学館／芦ノ芽グループ
深江青少年協議会／日本玩具博物館
東灘区民センター／神戸商船大学
深江ショッピングセンター
サンテレビ／神戸史学会 <順不同>
- ◇史料館員・役員◇
- | | |
|-------|-------------|
| 理事 | 磯辺 信三／大国 正美 |
| | 太田垣正雄／小嶋 悦廊 |
| | 坂上和三郎／志井 正夫 |
| | 志井 保治／杉浦 昭典 |
| | 田辺 真人／松尾 福夫 |
| | 深山 健二 |
| 館長 | 杉浦 昭典 |
| 副館長 | 大国 正美 |
| 事務局主事 | 阿部 英子 |
| 主任研究員 | 望月 浩 |
| 研究員 | 伊東 玲子／下久保恵子 |
| | 藤川 祐作／道谷 卓 |
| | 望月 友二 |
| 事務局員 | 田部美知雄 |